



第117号
発行所 小田原史談会
小田原市南町2-3-21

昭和五十八年度総会次第報告

会長 中野 敬次郎

昭和五十九年四月十五日
(日) 市営郷土文化館会議
室で五十八年度総会を次の
順序で開催しました。

- 1 小田原史談会四月定
例理事会(午前十時) 史談
会役員(任期二年)の改選
期に当るので規約に従って
理事会で役員改選を行って
新役員を選出した。新役員
は総会において承認を求め
ることとした。
- 2 総会(午後一時)
総会式次第
。司会者挨拶相沢事務局長
。開会のことば香川副会長
。会長挨拶 中野会長
。議長選出 平岡副会長
議事
イ、五十八年度事業報告
。相沢事務局長
。五十八年度決算報告
。曾我副会長
。五十八年度監査報告
。下川理事

小田原史談会58年度収支決算書及び59年度予算

昭和58年度決算		昭和59年度予算	
(収入の部)		(収入の部)	
繰越金	427.624円	繰越金	362.943円
会費	1,067.500 (2,500×427)	会費	1,000.000 (2,500×400)
市から補助	24.000	市から補助	24.000
預金利子	8.768	預金利子	5.000
雑収入	55.500	雑収入	5.000
計	1,583.392	計	1,396.943
(支出の部)		(支出の部)	
通信費	277.130	通信費	300.000
会報印刷費	280.000	会報印刷費	300.000
名簿作製費	73.500	講師謝礼	90.000
講師謝礼	30.000	交際費	50.000
交際費	64.000	事務用品費	30.000
事務用品費	21.969	編集手当	40.000
編集手当	40.000	事務手当	360.000
事務手当	360.000	会議費	80.000
会議費	67.350	特別原稿料	50.000
		30周年記念 事業準備費	30,000
雑費	6.500	雑費	20.000
計	1,220.449	予備費	46.943
残金	362.943円	計	1,396.943円

特別会計(史跡めぐり収支報告書)

S58. 6.20~21 浜松方面 44名参加 9.11 県央地区
50名参加 11.3~4 鉢形城 44名参加 S59, 1.22 新
年初詣 80名参加 3.11 奥摩多方面 45名参加
前年度よりの繰越金 360.329円
今年度収支合計
収入 2,386,473円-支出 2,301,143円=残 85,330円
繰越金 360,329円+今年度残金 85,330円=445,659円
は次年度にくりこします。 以上報告致します。

万葉集に見える防人の歌
を多数あげて、その中にあ
らわれている彼等の父母妻
子に対する恩愛の情、宿命
に對する悲感を詳説して万葉
時代人のこころを高揚して
聴衆を感動させた。

昭和五十九年度
史談会事業計画案
一、史跡めぐり
歴史研究の旅
1、六月 伊豆半島一周
(一泊二日) 伊東三浦按針
旧跡、八幡野血塚、河津兄
弟遺跡、白浜神社、下田お
吉、ハリス、松陰遺跡。玉
泉寺 了仙寺 長楽寺 松
崎依田旧家 猿園 松崎浄
感寺 こと絵師入江長八墓
岩科学校 土肥金山跡

戸田造船跡
2、八月 千葉 国府台
松戸方面(日帰り)
千葉寺 加曾利貝塚 大
運寺千葉一族墓地。国府台
戦跡。松戸野菊の墓 松戸
矢切の渡
3、木曾路 日本ライン下
り(一泊二日)
塩尻宿 奈良井宿 日義
村德音寺木曾義仲遺跡。島
崎藤村遺跡 中津川 日本
ライン 一宮
4、六十年一月 初詣 世
田谷史跡めぐりを兼ねる日帰
り 参拝 明治神宮 松陰
神社 豪徳寺ポロ市 世田
谷城址 教学院 大久保氏
墓 岡本秋陣墓 代官屋敷
蘆花公園

5、三月 筑波山 小田城
方面(日帰り)
土浦 霞浦 筑波パール
ライン ケーブル 薬王院
筑波大学 小田城
二、講演開催 三回
四月 七月 二月の予定
歴史のみに限らず各方面
に研究業績のすぐれた人を
招いて、会員で話をきく。
史跡めぐりのない月に行う
三、会報発行(四回)
一一七号より一二〇号に
至るまで四回発行する。原
稿は歴史物に限らず論説、
文学作品、随筆などとしど
し寄稿して下さい。
小田原史談会役員
五十九年四月十五日現在
会長 中野敬次郎

副会長	杉崎 正五	常任理事	松岡 俊子
〃	平岡 幸雄	中島慶太郎	
〃	曾我 保夫	田村 隆	
〃	相沢 栄一	長谷川英磨	
事務局長	香川 政治	杉山 米吉	
〃副	下川茂三郎	川瀬 春雄	
〃副	沖山 敏子	吉崎ヨシ江	
編集局長	杉崎 正五	府川 芳杖	
〃副	下川茂三郎	佐倉 仁重	
会計	曾我 保夫	国見 隆彦	
〃	沖山 敏子	飯沼 恒男	
監査	富田 千春	鈴木 久子	
〃	岩田 栄	宮川 嘉英	
顧問	竹見 龍雄	西山銈太郎	
〃	杉山 博	和田 次郎	
〃	加藤 誠夫		

北村透谷家譜の探究

中野 敬次郎 (2)

(一)大物医師北村玄塊の生涯
北村家系譜調査中に新しく浮上した北村玄塊とはどういふ人物であろうか。

前回に記述した北村家の系譜資料によって見ると北村家が医家として名をあらわしてくる最初の人物は、海翁円室庵主こと北村玄塊という人物で、時代は安永天明、寛政の頃の活動した人であった。

北村家系譜の三資料である長泉寺過去帳、北村家先祖代々牌、清龍庵墓石を見ると、どの資料もみなこの人つまり玄塊を中心として

記されていることがわかるので、北村家における玄塊の重要性がほぼ想像できるのであるが、どの資料にも玄塊以前の相当古い人物が二人挙げられている。独翁性憐信士(寛文三年四月十五日歿)と白意紹雲信士(寛延三年六月二十七日歿)とで、長泉寺過去帳によると「独翁」は「久太郎父コト」とあり「白意」は俗名を「宗左エ門コト」と記しておいて二人は北村家先祖として重要な人物らしいが独翁の俗名は不明であって「久太郎父コト」とあるか

ら、その子に久太郎という人物があったらしいが、久太郎は歿年も諡号も不明で北村家資料にはない。また、この独翁歿年の寛文三年(二六三)と白意こと宗左エ門の歿年の寛延三年(一七五〇)とは約九十年に近い年の隔りがあつて、この二人の間には少なくとも一、二人の人物が実在しなければならぬ。

独翁は北村家一族のうちで資料にあらわれる一番古い人物であるところから、またその歿年から推定して彼の活動年代からして、北村家が前川村の町谷に定住した時代の人物で、恐らく北村家帰農の始祖であろうと推定され、その子久太郎より家を興し、数代の久太郎を経て宗左エ門に至りその宗左エ門の子に問題の人物北村玄塊が生れたと思ふ。そこで、独翁を「久太郎父」とあつて俗名が記していないが、仮にこの人を初代久太郎と仮定して、初代久太郎、二代久太郎、三代宗左エ門四代を玄塊と一応見ようと思う。しかしこの系図はあくまでも推定にとどめるものとする。いづれにしても玄塊以前は北村家は純農であつて、玄塊に至つて初めて医家として登場することになつたので

ある。さて北村玄塊の名が明確な資料に見えるものとしては、清龍庵墓地の三界万霊塔である。この塔は墓地の入口の右側にあるが、塔の表面に、「三界万霊十万至聖。寛政三辛亥年三月十五日」と彫り、裏面に施主十二名の並記している中程に「北村玄塊、同とよ」と記し、最後に「相州前川村町屋・世話人道雄」とあるのを見ると、清龍庵の住僧道雄の勸進によつて町屋の有力者達の出費奉納によつて出来た碑塔であるが、当時玄塊が町屋の北村家の当主で、地元の有力者の一人であることがわかるが、玄塊とよの併記した書き振からして、とよは玄塊の当時の妻(保室智祐信女)であるらしい。

この外に同庵墓地に玄塊の墓がある。これは北村家一族の墓地に独立して存在するもので

「寛政十二庚申閏四月十七日 海翁円室庵主 各霊 実如貞呼信女 安永六丁酉十月三日 施主北村寿杉立之」と彫してあるが、俗名は記していないし、建碑の年も記しておらぬが、玄塊夫妻の墓であつて、実如貞呼信女は玄塊の先妻であつて、この夫妻の間の息子北村寿杉が建立したものである。さて、一言しておきたいのは玄塊の諡号で、この墓の他に、同墓地内にある北村玄快建立の一族供養塔に「海翁円室庵主」とあり、長泉寺過去帳には「実叢齊海翁円室庵主」とあつて、北村家一族のことを記するものには、必ずあらわれているし、また一族中において玄塊一人の諡号のみ居士を用いないで、上位と考えられる庵主を用いているのは注目される。

過去帳に見える実叢齊とあるのは玄塊生前の称号であるらしい。

また、前記の諸資料によると、北村一族の中で、玄塊の父母、妻子など、彼に最も近縁の人々諡号が多くあらわれてきていて、彼の周辺とその生涯の輪郭が大略知ることができるのである。まづ玄塊の父母についてであるが、父と推定されるのは、前述したように「白意紹雲信士」こと北村宗左エ門であるが、母は「徳因寿性信女。天明四年十月十二日」とある人で、この人は長泉寺過去帳に「玄塊母」と註記しているので明かであるが、「徳因寿性」の諡号からして長寿

を保った人であるらしく、そうだとすると、父だと推定される宗右エ門(白意紹雲)の死亡の寛延三年(一七五〇)より母の死亡の天明四年(一七八四)まで三十余年の開きがあるけれども、この二人を夫妻と見ることとは無理なことではない。次に玄塊の妻であるが、彼は生涯に三回妻を迎えている。

「真如涼月信女 明和二年(一七六五)八月二十四日 実如貞呼信女 安永六年(一七七七)十月二十六日 保室智祐信女 寛政三年(一七五二)四月十七日」の三人がそれである。

「保室智祐信女」は長泉寺過去帳の註記に、「玄塊家内」と記してある女性で玄塊最後の妻である。

三界万霊塔は寛政三年三月十五日の建立であるが、とよ(保室智祐信女)の死は寛政三年四月十七日であるから、建碑より僅か一ヶ月後に死亡している。恐らく建碑の頃とはすでに重病の床に伏していたので、彼女の歿後の冥福を祈る心持で、特に彼女の名を寄進者の名の中に加えたのだらうと想像される。

「実如貞呼信女」がとよ(保室智祐信女)以前の女

塊の妻であることは、前述したように北村家墓地にある北村寿杉の建てた父母の墓石に、父玄塊の諡号である「海翁円室庵主」と「実如眞吽信女」が併記してあるのでも明らかである。長泉寺過去帳では、その中に記されてある人物は諡号、歿年を記し、その下段に俗名か、俗名のないものは血縁を書いてあるのであるが「真如」「実如」の両女は一番最後のところに並べ記して、俗名も血縁も記してなく、下段が空白になっている。

恐らく「保室智祐信女」を「玄塊家内」と記したので、先妻、先々妻の両人についてははばかって空白にしたものと思われる。しかし、北村家一族位牌にも、玄快建立の一族供養塔にも、「真如」「実如」の両女が必ず加えられてあって、歿年月も明記してあるのは、玄塊愛妾の類ではなく正妻であったことを意味するものである。

最初の妻を亡った後、二度、三度と妻を迎えたけれども、両女とも十年前後で世を去ってしまった。玄塊は晩年十年間は配遇者なくして暮した。長寿を保った男であつたらしい。

なほ玄塊については、地元前川の研究家内田勝彦氏の調査して発表されたところによると、前川の向原に北村玄塊の名を刻した半鐘が発見され、それには「大日本国相州。足柄下郡。前川村町屋。天陽山清庵寺（銘略す）天明七丁未嘸月吉日長泉六世悟峰祖門欽記願主当庵英岸道雄禪門大工 小田原 山崎与治右エ門 請元 山田半重良 金百疋 当村 北村 玄塊 同 椎野平三良（以下略）」とあることが報告されているが、これは前記した清庵墓地の三界万霊を併せて、玄塊が北村同族中や郷土において高い地位にいたことを示すものとして注目すべきで、ともに時の清竜庵住職の英岸道雄和尚と計って檀寺の隆興につとめていた実績のあらわれであつて、半鐘奉納の方が三界万霊塔建立より四年以前であつて、玄塊の名の見える最初のものであろうと思う。

ついでながら、この鐘の鑄造者の山田与治右エ門は小田原新宿住の代々鑄者師として栄えた山田家の一人で、名を三尚といつて、寛延以後六十年の永きにわたつて多くの寺鐘を鑄造した名工であつたが、太平洋戦争のときの寺鐘供出の厄にあつて、大半の作品が失われてしまったので、その点でも数少ない遺品として珍重すべきであらう。

元来北村家はなかなかの旧家で、室町時代に周防国の名族大内義弘の後裔で、戦国時代に大内義隆が家臣の謀叛によつて滅び、天文二十二年（一五五一）に九月一日長門国深川の大寧寺で義隆自刃して以来一族分敬し、北村家はその子孫であると伝えてゐる。前川に土着して以来は農業を営んでいたが、玄塊に至つて農業の傍ら医家を開業するに至つた。

彼が初めて医術を学び、医業を開くにいたつた事情はよくわからない。しかし、玄塊は生涯小田原藩の家にはなつていない。また前川村町屋の北村家当主として在任したが、北村家の一全盛期をもたらした人物で、地区でも主動的人物として活動したことが種々の点からうかがえる。医術の方もすぐれていたであらう。とにかく玄塊は在家医師の大家であつたらしい。

あつて、大半の作品が失われてしまったので、その点でも数少ない遺品として珍重すべきであらう。

元来北村家はなかなかの旧家で、室町時代に周防国の名族大内義弘の後裔で、戦国時代に大内義隆が家臣の謀叛によつて滅び、天文二十二年（一五五一）に九月一日長門国深川の大寧寺で義隆自刃して以来一族分敬し、北村家はその子孫であると伝えてゐる。前川に土着して以来は農業を営んでいたが、玄塊に至つて農業の傍ら医家を開業するに至つた。

彼が初めて医術を学び、医業を開くにいたつた事情はよくわからない。しかし、玄塊は生涯小田原藩の家にはなつていない。また前川村町屋の北村家当主として在任したが、北村家の一全盛期をもたらした人物で、地区でも主動的人物として活動したことが種々の点からうかがえる。医術の方もすぐれていたであらう。とにかく玄塊は在家医師の大家であつたらしい。

北村玄塊の子たち
北村玄塊は長寿を保つて何回も結婚しているので子供も多かったらしいが、その一々は明かでない。男の子としては、北村家

二代目医師となつた玄快がある。すでに記述したが、北村家墓地の中に玄塊夫婦の独立墓石があるが、それは「海翁円室庵主」「実如眞吽信女」の二つの諡号を併記してあるもので、「海翁」は玄塊であり、「実如」は玄塊の二回目の妻であるから、この墓は建立者北村寿杉が父母の死後にその供養の墓石を営んだものであることがわかるが、それと同じ時に玄塊の子寿杉が第二回目の妻の子であることも知られる。

ところが、玄塊の息子として挙げられた玄快と寿杉の二人の関係に疑問がある。寿杉はこの一個の墓石に彼自ら彫した名が見えるだけで、他の資料に一切名が見えない。当時の北村一家のすべてを列記してある過去帳の中にも位牌にも一族供養墓にも名が見えない。玄塊の子である寿杉の名が他の資料に見えないというのは不思議であるが、これは後に改名したからに違ひなく、改名して玄快となつたので、寿杉と玄快とは同一人であらう。

寿杉は玄快の若き日の称なのであらう。この墓石は父玄塊の歿した寛政十二年（一八〇〇）四月十七日以後に建てられたものであるが、そうすると玄快は天保十二年（一八一八）に極めて長寿で死んでいるから、若き寿杉時代に父と実母の供養墓を営んだと見て可能なことではないかと思う。

酒匂「はんべの宿」について

川瀬 春雄

はんべなる前の川瀬を行く水の
はやくも今日の暮れにける哉

この一首は鎌倉將軍実朝の作歌で、その歌集金槐和歌集に載せられているものである。これには次の様な詞書が前置されている「二所詣下向に『はんべの宿』前に前川という川あり、なが雨ふりて水まさりしかば日暮れてわたりはべりし時よめる」と、ここに言う二所詣とは何であつたかと言ふと源頼朝旗上げ以来縁の人とも長泉寺の北村家の過去帳に「玄塊娘」とあるの明かであるが、過去帳の書き振りからして玄塊の最後の妻、保室智祐信女（寛政三年四月十七日歿）の生むところの女性であることが解るが、兩人とも諡号から見ると結婚するまでに至らず早逝したことが察せられる。

以上、玄塊の子としては一男二娘が挙げられるが、他家に養子入婿したり嫁に行つたりした息子や娘もまだあつたのであろうと思われる。（つづく）

深い箱根権現と伊豆山権現の二社を指すもので鎌倉將軍家ではこの二社と三島明神への参詣を重要な年中行事としていた。將軍頼朝を初め夫人政子、頼家、実朝代々の將軍重臣等が参詣している。冒頭の一首は、実朝がこの二所詣の帰途酒匂「はんべの宿」において詠んだものと言ふ。次にこの酒匂「はんべの宿」とはど

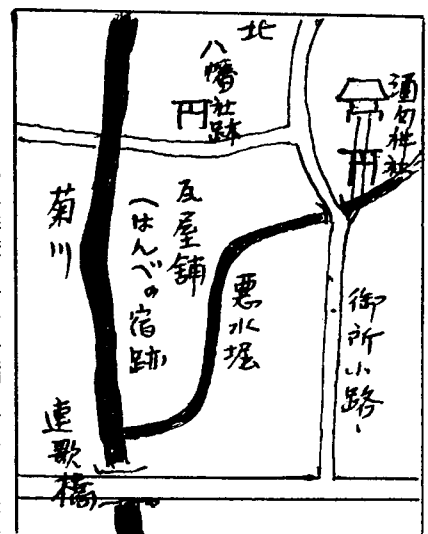
の様なものであったのだらうか、この事について酒匂町の古老達にきいてみて、今は言い伝えも消え絶えて何一つ残されていない。しかし古書吾妻鑑には「はんべの宿」について多くの記事が残されている。それ等の多くは鎌倉将軍の上洛、箱根、伊豆山の二所並びに三島明神参詣に関するもので將軍頼朝、その夫人政子頼家、実朝を初め、その後將軍頼朝、宗尊親王、執権重臣による代参等を含めて約八十年間に四十回もあつた事が細く記載されている。又これ等の記録によつてこの三社への参詣順路をみると例外はあるものの鎌倉一箱根一三島一伊豆山一鎌倉と言うコースであつた事、その所要日数も六日から七日あつた事等も知られると言ふ。先づ鎌倉を發つて一日行程の最初の宿泊地が酒匂「はんべの宿」であつた。この鎌倉酒匂間の行程は記録の上から大体八時間程度かゝつたであろうと考えられている。なお往路だけでなく帰路の時も必ずこの「はんべの宿」に泊して鎌倉入りしている。さてこの「はんべの宿」については義経にかかわる悲しいエピソードがあつた事も既に知られている。華々

的存在から一転して悲劇の主人公へと転落して行った義経は文治元年(一一八五)五月生虜とした敵將前内府平宗盛父子を鎌倉へ護送の途中この酒匂「はんべの宿」に着いた。一行は兄である將軍頼朝からの鎌倉入りの許しを待つて旬日をここに過ぎた後、腰越迄行ったものの遂に頼朝の忌避は解けず仕方なく引き返し再び「はんべの宿」に一泊し酒匂駅を後に京に向つたと言ふ。同年十月には義経追討の命が出され悲しい運命を迎へる事になつた。この話は年代から考えておそらく建てられてまだ間もない頃の「はんべの宿」での事であつたろう。

さてこの酒匂「はんべの宿」が鎌倉幕府にとつてどの様な存在であつたかは先記の如く八十年にわたる記録によつても明瞭で幕府公用の施設であつた事を史家も認めているところであるではその宿舎の規模はどの様なものであつたであろうかこの事については具体的に知る事はできないが吾妻鑑の記事から推理するより方法はないであろう。この「はんべの宿」が使われた数多くの記事の中で二所詣に比較して何と言つても將軍の上洛の場合が最も多くの家臣団が従ひ宿泊したと

みるべきであろう。吾妻鑑応仁元年二月十七日の条の四代將軍頼朝が上洛した時の記録によれば御家人二四八人その家の子郎党九〇人計三三八人もの多勢の者が従つていた事が明らかにされている。この様に家臣団についての記録はないが頼朝建久元年上洛の時は頼朝のそれを更に上まわつた人数ではなかつたか、これらの事から考えて將軍以下四百人近くの者が宿泊するとしたら將軍、重臣の宿舎を別にしても百坪程度の建物四棟位は存在したのではなかつたかと考えられる。

この事に関連して考えられるのはその当時この酒匂に福田寺と称する寺のあつた事である。新編相模風土記稿によると吾妻鑑の中に將軍頼朝の帰依僧で義慶なる僧が鎌倉からこの寺に籠棲していた、その為建久三



年八月頼朝の命により夫人政子の平産祈願を相模國の二十五の寺社と共に行ったとある。現在の酒匂の南蔵寺はその位置は違ふが福田寺の後身であると言ふ、瓦屋舗の入口近くにある今の酒匂神社(明治以前の駒形社)の別当寺はこの南蔵寺であつた事から考えて福田寺は酒匂神社の周辺即ち瓦屋舗の近くではなかつたかと考えられる。いづれにしてもさほど離れてはいなかつたであろう。としたら將軍上洛、二所詣でと言つた場合にはこの寺が「はんべの宿」の補助的役割をなしていたのではなかつたかと考えられる。

「はんべの宿」はどこにあつたのか。「はんべの宿」が酒匂のどこにあつたかについてはその歴史の価値の点からか今迄あまり深い感心を持た

れてこなかつた様である。酒匂神社の近くにある瓦屋舗(かわらやしき)と呼ばれている一画がその場所と言われているが、これについての物証や文献が見えられていない為、今でも疑問視する向もある様である。ともあれ「はんべの宿」が酒匂にあつた事だけは吾妻鑑の記事等によつても確実と言つてよいであろう、瓦屋舗と呼ばれるこの一画は三十年程前迄大部分が畠地で一軒しかなかつた人家もこの数年新築家が建たんで畠地は僅かしか残されてない。「はんべの宿」があつたと言われるこの瓦屋舗について新編相模風土記稿酒匂村の条に御所蹟として次の様な記述がある。

○御所蹟 八幡の社前り潤三千坪、白田を開けり、北城に土手の形尚残れり(高六尺)今は瓦屋舗と言ふ、(中古此所にて瓦を焼きしと言ふ)源廷尉義経の邸蹟なりと。こは文治元年五月十五日義経内大臣宗盛父子を相具し酒匂駅に著せしに義経は鎌倉に入る事を停められ暫く此地にありて六月九日帰洛せし事(東鑑)等に見えたり(中略)是等に拠りて此伝あるにや、按ずるに鎌倉將軍上洛及二所参詣の路次酒匂駅に寓宿せられし記に酒匂浜御所など

見ゆ。今其旧蹟定かならざれども此地の南東海道の大路を「はんべ」と呼び「はんべ」より北に折れて爰に至る横街をもと御所小路と唱へし由今現に伝うれば所謂將軍旅館の旧蹟は此地なる事必せり(下略)……この記述は天保十年前後のもので、それから数へても六百五十年前の事であり可成古い伝承を因にしたもので果してどこ迄が真実を伝へているか疑しいと言われている。しかし「はんべの宿」についての文献として貴重なものと言へるよう筆者はこの御所蹟についての一文には十年來関心を持続けてきたがこの場所が一日と市街化して行く姿を目の前に最近漸くこの一文の内容と現状を比較照合し考察を加へてみたいと考えた。ここに言う御所蹟(瓦屋舗)とは図に示す様に酒匂町を東西に走る国道一号线の西のはずれバス停「酒匂中学」を北へ酒匂神社に向つて二百米のところ、神社の入口に巾三米程の悪水堀と呼ぶ小川が西南に向つて流れている。これとは別にその西側七十米のところ

に鴨宮方面から南流している巾七米の菊川との間に形成されたバイオリンの形に似た三千坪程と思われる地域である。

○八幡の社前なり……とあるが今この瓦屋鋪地区の周辺をいくらか見回してもそれらしい社の跡は見当たらないが風土記酒匂村の別条の中には八幡社の存在した事が記述されている。「八幡社

はも鎮守とす例祭駒形社と同じ神木に松樹一あり(周一丈一尺五寸)是も南蔵寺持……とある。その記述の時点でこの八幡社がどこあったのか、そして今どうなっているのか、これについておぼろげ乍らも知る人を捜すのは容易でなかったが今酒匂神社の拝殿前にあるトタン板で覆われた櫻造り

だが既に朽ちかけた三×四米程の小さい社が、この八幡社である事を近隣の古老の一人から確め得られた。それは大正の初期の頃、瓦屋鋪の北側の道路を隔てた松林の中の小高い所から移転されたとも証言してくれ

た。どこの神社も南向である様に、この社も瓦屋鋪の方角(南)を向いていた訳で、八幡の社前なりとの記述は古老の話と全く一致している。今この社の中を覗くと高さ五十程程の崩れんばかりに朽ちかけた木立像

三体があり社前には体長四十程程の石造りの素朴な高麗狗一対が置かれている。この社についての縁起は今何もわからないが源家の守護神八幡社であったと言ふ

事「はんべの宿」とか、わりがあつたのではないかと考えられる。○關三千坪白田を開けり：白田とは畠の事である。ひるさ三千坪あると言ふ、この地域は図にみる様に南北二百米、中央部の東西約七十米バイオリンの形に似た不整形をなしている。その地勢をみると菊川に沿った西側の三分の一は東側より一・五米程低く段差をなしている、鎌倉將軍家の宿舎のあつたのは当然の事乍ら東側の上段の広い場所であつたらう。この場所そ、酒匂「はんべの宿」が在ったところであると筆者も考えている。しかし今この事についての物証を求められても残念乍ら何もないが、相模風土記の中の二、三の証言こそこれを裏付け重要な手がかりではなからうか。

この場所に立つて西の方を眺めた時、大部分の人はむべなる哉と思ふ事であろう眼前に酒匂川が悠々と流れ遠く右手に秀峰富士が顔を覗かせ正面に箱根の連山が長々と聳え左へ伊豆半島となつて相模湾に延びてかすんでゐる。將軍頼朝にとつてこゝで眺めた箱根権現、伊豆山権現は何れも感慨深く忘れ得ない存在であつた筈である。

この様に箱根山の眺望を描写してきたもの、これは十五年程前迄の姿であつて今は視界の中に十階建のマンションや観光バスのドライブイン、一般住宅が建並んで場所を換へても、この全容を其儘眺める事な不可能である。

○北城に土手の形尚残れり(高六尺)北城と言ふのは東西に切通しの様になつてゐる瓦屋敷の北端を指しているのであるが、今は倉庫が建並んでその様なもの痕蹟も残つていない。この記述がなされた天保十年前後にはまだ、この様な高さ六尺も

の土壁が存在したと言ふ事は「はんべの宿」が実在した事を証明する遺構であつたらう、高さ六尺と言へば明らかに外敵に備へた土壁に違ひない、東南西の三方は万全とは言へないが自然の濠によつて或程度の防備がなされてゐたが北城だけは当然の事として土壁を築いたに違ひない。又高さ六尺とあるが、その時点より六百五十年も以前に造られた事を考えると更に高かつたのではなかつたか。

○瓦屋鋪(かわらやしき)についてこの地名は「はんべの宿」との関わりはないがこゝで一丈ふれておきたい、二つの川に囲まれた、この一画を瓦屋鋪と呼んできたが、地域内に新築家屋が建並んだ最近では次第にこの古い呼名も影が薄くなつてきてゐる。「中古こゝにて瓦を焼きしと言ふ」と註がついてゐるがそれ以上の事は何も分つてゐなかつた。酒匂川の河原に近いので河原屋鋪ではなかつた等とも言わ

れたこの場所に何故宿舎が置かれたのか。この事について周辺の地形をあらためて調べてみる事によつて今更乍らその理由が誰にもよく納得でき相を見渡してもおそらくこの様な地の利、要害の場所は他に見当たらないであらう、図にみる様に狭い地域乍ら二本の川によつて東南西の三方を囲まれてゐる、西側は鴨宮方向から流れる菊川(巾八米)が東海道にかゝる連歌橋を潜つて酒匂川の河口へ流れ込み東側の悪水堀(巾三米)は町の北方から酒匂神社の入口を過ぎて南流し連歌橋の手前で菊川に合流してゐる。この二本の川によつて抱えられる様に屋瓦鋪の地形が造られてゐる、不整形ながら南北二百米東西七十米の地域で三・四百人程度の集団の宿営には格好の広さであつたらう。しかも東海道から北へ僅か百五十米入つただけのところであつた事も好条件の一つであつたと言へよう

○今其、旧蹟定かならざれども此地の南東海道の大路を「はんべ」と呼び「はんべ」より北に折れて爰に至る横街をもと御所小路と唱へし由、今現に伝ふれば所謂將軍旅館の旧蹟は此地なる事必せり；下略、これによれば今の一号国道のバス停「酒匂中学」あたりを「はんべ」と呼びこゝより北に酒匂神社前に至る二百米の横街(今は横町と呼んでゐる)を昔御所小路と呼んだと今現に伝へる「はんべの宿」の旧蹟は間違いない

○次に「河原屋鋪」と呼ばる。吾妻鑑の中の数多の二所参詣や上洛の記録に「酒匂はんべ」「酒匂駅」「浜辺宿」等と其時々により違つた言ひ方で表現されてはゐるが、当時酒匂周辺の住民からは「はんべ御所」或は単に「御所」と呼ばれてゐたらしい事が想像される。鎌倉開府以来約八十年四十回もの永い年月この酒匂「はんべ」の御所が使われてきた事を想へば今の酒匂神社前の道路が御所小路と呼ばれてきた事が、極く自然の事であつた様に考えられる。

將軍の宿舎が酒匂にできたのはなぜか。どの様な理由で鎌倉將軍公用の宿舎がこの宿舎に設けられたのであろうか、之について先づ考へられる事は地理的条件である。將軍にせよ一行が鎌倉を發つて一日行程のところ、酒匂駅であつたと言ふ事である。又酒匂川渡河を前にて一區切りと言つた場所でもあつた、年中行事としての二所詣は毎年冬季であつて陽の短い時節に鎌倉を未明に発つても酒匂駅迄に陽のあるうちに着くのは可成の強行軍であつたらう。

○次に「河原屋鋪」と呼ばる。吾妻鑑の中の数多の二所参詣や上洛の記録に「酒匂はんべ」「酒匂駅」「浜辺宿」等と其時々により違つた言ひ方で表現されてはゐるが、当時酒匂周辺の住民からは「はんべ御所」或は単に「御所」と呼ばれてゐたらしい事が想像される。鎌倉開府以来約八十年四十回もの永い年月この酒匂「はんべ」の御所が使われてきた事を想へば今の酒匂神社前の道路が御所小路と呼ばれてきた事が、極く自然の事であつた様に考えられる。

將軍の宿舎が酒匂にできたのはなぜか。どの様な理由で鎌倉將軍公用の宿舎がこの宿舎に設けられたのであろうか、之について先づ考へられる事は地理的条件である。將軍にせよ一行が鎌倉を發つて一日行程のところ、酒匂駅であつたと言ふ事である。又酒匂川渡河を前にて一區切りと言つた場所でもあつた、年中行事としての二所詣は毎年冬季であつて陽の短い時節に鎌倉を未明に発つても酒匂駅迄に陽のあるうちに着くのは可成の強行軍であつたらう。

○次に「河原屋鋪」と呼ばる。吾妻鑑の中の数多の二所参詣や上洛の記録に「酒匂はんべ」「酒匂駅」「浜辺宿」等と其時々により違つた言ひ方で表現されてはゐるが、当時酒匂周辺の住民からは「はんべ御所」或は単に「御所」と呼ばれてゐたらしい事が想像される。鎌倉開府以来約八十年四十回もの永い年月この酒匂「はんべ」の御所が使われてきた事を想へば今の酒匂神社前の道路が御所小路と呼ばれてきた事が、極く自然の事であつた様に考えられる。



昭和59年史談会主催 初詣会

中野敬次郎記

鶴見総持寺参詣と三溪園見学

小田原地方は前日の雪は大した事はなかったが鶴見横浜方面は十センチ以上積って綺麗な雪景色だった、その中バス二台無事初詣も終了しましたので其の内容に付いて中野先生の書かれた案内書を次に記して見ます。

今後の見学の参考になれ
日時 一月二十三日(日)
午前八、〇〇小田原駅前出発 バス二台
コース

小田原八、〇〇一総持寺
一山下公園一沿岸一三溪園一金沢八景(称名寺金沢文庫)一戸塚(証菩提寺)一鎌倉一小田原一八時解散
〇総持寺。曹洞宗大本山諸嶽山総持寺。明治四十四年の建立。総持寺はもと石川県鳳至郡柳比村(現在の門前町)にあったが明治三十一年(一八九八)に焼けたので貫主石川素堂を中心とする強力な運動の結果、移転再建された。永平寺と並んで曹洞宗の二大道場とし

が母の長寿を祝って建てたもの
⑦東慶寺仏殿(重文) 唐様の禅宗仏殿
⑧三重塔(重文) 京都灯明寺の三重塔。一五世紀半のもので関東最古の三重塔
〇称名寺 鎌倉幕府の評定衆北条実時が一三世紀後半にここを別荘地として持仏堂をたて審海和尚をまねいて開山として真言律宗の寺としたに初まる。

実時はここに莫大な蔵書を集めて自学の士の研究に供したので金沢北条氏の保護と高名な学僧の住持によって金沢文庫と称せられて有名である、小田原の北条氏康、氏政が保護を加えたのは有名である。仁王門の

二王像は鎌倉末期、本尊の弥勒菩薩像は鎌倉期の宗風彫刻、釈迦堂の釈迦如来像は鎌倉末期の清涼寺式、梵鐘は実時の子顯時の寄進。以上仁王像以下みな重文である。今は境内に独立した県立金沢文庫がある。
〇証菩提寺、横浜市戸塚区稲荷森近くにある、古義真言宗。源頼朝が佐奈田与一義忠の追福のために建立した寺。鎌倉時代は本堂の阿弥陀堂を中心に七坊があった。阿弥陀三尊像(重文)は頼朝の奉納したものとして有名である、堂後に与一の父岡崎義実墓というものがあ

我が郷土の 我が家の年中行事

西山 銈太郎

年々歳々新しいものが出来、古いものが失はれて行く。郷土の行事も古い習慣が失はれて行く。その古い習慣で育って来た者は大変残念に思う。
それで、我が郷土の、我が家の古い習慣を将来誰かが目にとめて呉れるものと

思い、記してみる事とした。現代人が見たら、古くさい誠にくだらぬものかも知れないが、私はこの習慣、風習、行事の失はれて行くのが大変に惜しい、残念である。我が家は、我が郷土に昔から住んで、昔ながらの生活を、行事を努めて維持

して行から、維持して行きたいと強く願って居る者である。
一、元日
年をとるのは余り好ましくないものではないが、正月になると、やはり何とはなしにホッとする。昨日迄の慌だしさがうその様に感じられる。
神棚仏壇・もちつき日・倉の米俵の上にお供もちを上げる。蔵神さんは二組でお灯明を上げる。神棚えは生もちをズッキと称する木の皿にのせ、丸く切って白湯で煮た大根を添えて上げる、仏様には焼いたもちを上げる。我が家では床の間へは「丸山のお稻荷さんもどうぞ御一緒に上って下さい。」と云って上げる。仏壇に上げる時には「台畑の仏さんどうぞ御一緒に上って下さい。」と心の中で念ずる。それは遠い昔からの申送りである。私が上げる時には声を立てるのは、何とはなしに面映いから声を出さないが、祖父はしのび声だったが傍の者にもよく聞える様に唱えた。以上でお神棚を上げる事は別として、その他は三ヶ日共同である。
右が終わって一家全員元日のお祝であり、此の日許りは朝から酒である。そして

雑煮を食べる。
午後一時から部落の氏神さん天津神社に、部落中の者が集まり、お神酒を上げお払いをして、そのお神酒を一口づつやり後は燗をして呑んだ。これが部落の新年会である。
これが終ると、曾我谷津の大光院と、各自の菩提寺へ年始に行く。此の際御年賀と書いて何がしかを包んで行った。
我が曾我岸部落では昔からの家は全部河原の瑞雲寺の檀家だったので、今でも瑞雲寺が多い。瑞雲寺では年賀の御挨拶の後、本堂へ行って各々自家の何回忌の仏さんがあるかを調べて来る。
二、一月二日
朝食後、一家総動員で家の掃除をする。昨日は朝から呑むだけで何もしなかったが、今日は大掃除である男も雑布を持って長押や高い処を、女は比較的ひくい処をふく。
一応掃除が終わると明日の準備をする。
三、一月三日
我が家は年始につき朝から忙しい。朝簡単に掃除をしてからが大変だ。女は御馳走を作る。男はお膳や座布団や火鉢、灰皿等を出し更に細い点は女房の指示を受ける。もう用がないかと

思って、新聞や年賀状を見たりしてると又女房に用を云いつけられる。

我が家では親戚と云へば上曾我と国府津が殆んどで戦前は、すしや煮メヤを持たせてやったが、昭和三十年頃になると、毎日の食事と正月の御馳走とはあまり差がなくなりました。

それで持たせてやるのは止め様と協定が成立した。忙しいお年始が終ると、夜には神棚等のお供も下げて、家畜の飼葉切用押切りで切る。かたくなっているの楽ではない。此のものは後日の行事に使うので食べないでとっておく。但し仏壇へ上げたのは、神様へ上げてはいけないから、別にして、食べてしまう。

四、一月四日

朝食後、門松と入口のおかざりけだを取ってしまふ四日は坊さんのお年始だから、坊さんの来ない中におかざりを取らなければいけない。四日は坊さんのお年始だから、一般の人は絶対他家へお年始に行かない。

四日は又仕事始め、山祭り、農家では、予て準備して一文かざりを、お供もちの切った切れはし、それに一つまみの白米を半紙に包んで、山へ持って行き、おかざりを木に立てか

け、白紙に包んだもち、米等をひろげて山の神に捧げる。此の際におかざりを立てかけるのに生き木にかけてはいけないと、父から毎年か知らない。そして山道を登って来る時、途中権現山から左方へ行くと瑞雲寺の山林があり、そこに女竹が沢山生えてる、それを数本切って行き、これをさいて粗朶を刈り取り、これを束ねる。二束で一荷で、両方を削ってとがらした「トンガリ棒」でかついで帰った半日で一荷はとれたので、これで午後は休みだった。

五、一月五日

家に依っては、今日又は七日に年始が行はれた。勿論その後の日に於ても行はれる。

七、七草

昨夜神棚下でたゝいたのがそのまゝになつて。朝男は寝てるので、今度は女房がたく。その野菜を切って釜に入れて七草がゆを作る。かゆと云つても実際はおじやで、我が郷土、我が家では、昔から七草のおじやと云つた。七草がゆなんて言葉は、何処か異国の言葉の様な気がする。

六、一月六日

今日からはもう一日中仕事を。昨日迄は殆んどが休みだったが、仕事をするには小遣はいらぬが、遊ぶには金がある。夜、歳神さんの棚下に木鉢を置き、七草をのせたまな板を置いて、片側に火ば

しをのせ、片手にしやもじ片手にすりこぎを持って「七草なすな唐土の鳥が日本の國に渡るぬ先に合はせてバタ／＼合はせてバタ／＼」とたゞく。「唐土の鳥と日本の鳥を合はせて「バタ／＼」とやらされたりしたのが、どれが本当か、意味は解つた様な解らない様なだった。声を立てゝやれと云はれて子供の頃は恥かしかった。

八、初卯の日

初めての卯の日には、お神の上りと云つて朝しるこの作り、先日のお供もちを入れて、神様仏様に上げ、家族一同で食べた。

七草のおじやは厄除けま除けだと云つて、若しも何かの都合で家の中に、此の日食べる事の出来なかつた者には、二日や三日の後でも食べさせる様主婦は配慮した。

お神が上つたのだから、歳神さんはお朝夕の食事やお灯明等も上げなくてもいゝと云うが、我家では一月中は総て上げ、お祭りをした。

九、鏡びらき、倉びらき 一月十一日を鏡びらき、倉びらきと云うが我家では今日迄お供もちを切らないで置いては、かたくなつて切りにくいので、三日の夜切るに決つてゐる。十一日がお倉びらきだなんて云つても、農家で十日の上も倉が開けられなくて困つてしまふ。それで時には元日も用があれば開けてしまふ。

此の日も朝はしることを作つた。もちは以前の様に切つたお供もちである。このもちは十五日の小豆がゆにも使うので、普通のもちも勿論食べる。

昔は甘い物が大好物だったので、この日とお神の上りの初卯の日を待つた。時には初卯の日が十一日だったりもした、その時には朝と昼の二回がしるこだった。大体が初卯即ちお神の上りはあまり早くてもいけないし、あまりおそくても、その年はいゝ年ではないと老

人は云つた。まあ十二日迄の中の中央五日間位が一番いゝ年だと見られて来た。更に此の日、もち白のおかざりを取り、臼を起し

風流小田原の街歌

川瀬 速雄

翰長嘗て駿尾画伯と小田原幸町の福家に遊んだことがある。時はたしか大正三年の夏、福家は有名なる早苗老嬢の経営する所である画伯はよく飲み能く語り、翰長はよく呑み能く語り、座は中々賑やかなことであつた。座に侍した老妓関弥は小田原きつての美音で知られてゐる、宴、酣にして翰長は小田原の名物歌をと求めたが生憎小田原にはそれが無い。早苗は傍から翰長に「是非作つて戴きたい」と懇望した。そこで翰長は直ちに次のやうな大津絵節を書いて与へた。

小田原を立ち出でて、いたつき愈す湯本より、登りもいとと塔の沢、今宵の宿は堂ヶ島、結ぶの神の宮の下、いのる心の底倉を知るやしらねや木賀しれず、ほんに縁が芦の湯とあきらめきれぬが恋の道。

て榊に米を入れて供え、それを杵でつくしぐさをしたこれ迄は臼の上に何かを置くと叱られた。

の交の翰長の旧作で、赤坂石廻家柳絲が名古屋甚九として歌つて居たので、既知っている人も多いである。

酒酣にして関弥は「東京の或るお客より教へられました。」と言つて

小田原の藩にうたる

篝火は

森の林に宿かりて

どこへ仰のうかれ船

といふのを歌ふた。その音律は神に入つたもので翰長は深く其の美妙さに打たれた。

「是は宜い手が付いた、これを小田原の町歌にすれば可いな。」

「左様存じますが、チョイトネとか、サノサばかり外出来ぬ妓共には、荷が過ぎます、せめて文句だけでも今少し砕けたものだ、少し可いのですけれど。」と関弥が小首を傾けたので、何か代へ歌をと乞ふままに翰長が即座に着想したのは

の次の二つであった。

(一)

小田原の城の廓に

咲きはこる

躑躅の花の美しさ

元は箱根の山育ち

(二)

小田原の街に咲たる

撫子の

花の優しさうつくしき

元を質せば江戸育ち

白砂青松の相映する処、

箱根環翠楼の笑話

故伊耕春畝公と輪長

川瀬 速雄

明治三十八年の春、東京は上野、向島、飛鳥山、桜が今を盛りに咲いて、人の出盛る四月半ばのことであった。激務に疲れた体の健康を回復するために、輪長は都の花を函根に避けて、やがて予定の日数は尽きたので帰途に就いた時の事である。図らずも、烏森の榊田屋の女将お筆と、琴玉堂のお玉(今の待合蜻蛉の女将)とが連れ立って国府津の汽車から降って来るのに出会った。二人とも輪長とは随分古馴染の親しい仲であるから何彼と話したいことも数々あったが何分咄嗟のことではあり、汽笛と共に汽車が動き出したので、

月清く波静なる小田原の夜この「小田原の……」は、誰が唄ひ伝へたか、近頃になつて時々聞かれるやうになった。その律呂えて之を聞いてみると、何にとなく淋しい気持ちに誘はれる悲しい哀しい唄である。そのなかに東海道五十三次、来る人往く人の流れてやまぬ昔語りの宿場の情趣が家しく淋しく流れている。

とした姿によく配る立派な妓さんになりそめる頃、まだ大学の門に通うて居た輪長は遂に遺瀨ない心を、この女に打明けたが思うに任せぬのは世の中である。少女の心は、この十年馴染んだ初馴染の熱い思いを、汲ますに人もあろうに其青年の学友に当る他の一人(前青森県知事武田千代三郎氏)を慕したうて二人は切ない恋に陥った。それと意識はしなかつたにせよ、永い十年の恋は夢と消えたのである。可憐な失恋の青年それは言うまでもない粹輪長其の人であった。情なかりし少女は誰、それが今日の新橋『待合蜻蛉』の女将国府津で出会った琴玉堂のお玉彼女であったのである。初恋ほど力強いものはない失恋ほど永遠に続く恋はない。思へば既に過ぎ去った夢の姿に過ぎないが、今眼の辺忘れても忘れ得ぬ其の女の姿を久し振に見たものである、既に家には愛すべき妻を持ち子さへ持った輪長の胸にもさすがに燃え立ちた青年時代の傷ましいことなれど楽しかった絵巻物の一巻が展げられた。歌はその回想に咲いた哀しい華であった。

のは女将と共に環翠楼に滞在中の春畝公の召に応じて行く途中であったのである。輪長はそんなこととは夢にも知らなかつた。葉書は着いた。そしてこれを眺めた春畝公、何と思はれたか、直ぐに東京に打電して、輪長に直ぐ来るようにとのことである。電報を受取った輪長は急遽の招電、何事であるかと支度もそこそこ、引返して、塔ノ沢に着いた。そしてまだ旅装もとくかとかぬにお玉が出迎へて輪長に渡したのは、春畝公の自作の都々逸であった。曰くくやしいわけだよ

貧乏なわたしなんでも喰うかと人がいふ

そして其側に(これにて此の場の御判断を乞ふ)といふ添書がしてあつた。これはいうまでもなくお玉と輪長とが曾て関係のあつたことを輪長が送った葉書で初めて知つて、輪長の残酌でも何でも拘はず食する人と人が笑ひはすまいかという意味を含ませたものであつた。輪長は直ぐ老公の席に出て、想出深い一宵を老公と共に飲み明した。輪長はそこに数日逗留したが、或夜、

さしてうれしき庭の卯の花の一首を即興して、これを春畝公に呈した。之に對して意味の深い春畝公の返歌があつたが、惜いことに輪長も失念したとのことであつた。

これで三つ巴函嶺仙道の一挿話は尽きたが、函根と言へば序に尚ほ二、三記すべきことがある。

輪長嘗て函根に行く途中関秀作家長谷川時雨女史と出会つた時、手帳の紙片に次のような一首を詠むだ。おおみよのふみの林に

時雨来て紅葉の錦色ましにけり

女史は之を受けて非常に喜んだといふ話もある。また輪長が同じ函根の紅葉を詠じたものに

白露の深き恵にうるほひて

老いも若木も色つきにけり

如月の花よりあかきもみぢ葉の秋を小春と

たが名づけけん

なほ前に記した輪長の初恋人、お玉は仲の町で小玉と云ひ、新橋に移し植えられて玉代と名詮り、一時全盛を唄はれたが、後稲田柁次(仮名)にひかされたが間もなく故あつて同氏と手を切り、今度は故伊藤公の

寵を得て公の勧めで琴玉堂といふ洋品店を開いたが、又間もなくそれを閉て、今度開いたのが待合「蜻蛉」彼女の性に合ったか、とん／＼拍子に暖簾をあげて東京の花柳界で名指される今日の盛りを招くようになつた。

輪長お玉恋のいきさつは誰かの著「蜻蛉物語」に記されて居るが、余程事実が違つて居る。

それは兎も角、暖簾名の羽風、涼し盆蜻蛉、この上ともに繁昌して上へ上へ登れとこそ祈つておく。雲の梯のよし断ゆるとも、雲の梯はよし絶ゆるとも。

尚文中、粹輪長は花房欽一氏、伊藤春畝公は伊藤博文公です。

編集部から

印刷屋堀内さんの御病気で会報も遅れましたが、漸全快され後尚療養中にもかかわらず一ヶ月遅れで出て頂けました。遅れました事悪からず、堀内さん全快後も御自愛の程お祈り致します。

尚会報も予定通り出したと思ひますので歴史物に限りませんから御寄稿下さいます様御願ひ致します。